

心理学理論と心理的支援

問題 8 次の記述のうち、防衛機制の投射の例として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 試験の成績が低かったのは、問題の文章表現が曖昧であったために、意味を取り違えてしまったためだと言い張った。
- 2 職場に気難しい性格の同僚がおり、自分としてはどうしても好きになれなかったので、その同僚が自分のことをよく思っていないと考えることで、かなり気持ちが楽になった。
- 3 上司が社内でも特に発言力のある人物であったことから、名刺交換の際に自分はその上司の部下だと必ず言い添えるようにしていた。
- 4 クラスの中に気の合わない人がいるが、同じグループになってしまったので、むしろ必要以上に友好的に振る舞って、活動に参加するようにした。
- 5 上司に呼び出されて強く叱責されたものの、それが自分では納得がいくものではなかったため、自席に戻ってからボールペンで消しゴムを突き刺し、不満の感情を発散させた。

問題 9 次の記述のうち、潜在記憶の特徴として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 健忘症の患者でも、基本的に劣ることはない。
- 2 頭の中で認知的な作業を行うときに必要となる。
- 3 感覚の種類ごとにあり、例えば視覚的な記憶であればアイコニック・メモリーと呼ばれる。
- 4 高度な知恵や熟達したスキルなどの表出にかかわる。
- 5 個人的な体験に基づいたもので、いつ、どこで、誰となどの情報が付加されている。

問題 10 次の記述のうち、性格理論の説明として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ゴールドバーグ (Goldberg, L. R.) は、YG性格検査を矢田部達郎が考案するにあたり、その基礎的な理論をもたらした。
- 2 キャッテル (Cattell, R. B.) は、性格は内向—外向という向性と神経症傾向という2つの次元でとらえられるとする特性論を唱えた。
- 3 ユング (Jung, C. G.) は、リビドーが発達のどの時期に固着するかをもとに、性格の類型化を図った。
- 4 シュプリンガー (Spranger, E.) は、人生を歩んでいくにあたり、どのようなものに価値や意義を見出すかが個人によって異なっていることを踏まえ、性格を6つの型に分けた。
- 5 フロイト (Freud, S.) は、因子分析法を用いて性格を分析し、タイプAと呼ばれる性格があることを指摘した。

問題 11 次の記述のうち、思春期の発達の特徴として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 人生の目標が明確になり、その達成に向けて動き始める時期である。
- 2 それまでは親に反発していたものの、少しずつ心理的な接近をし始める時期である。
- 3 基本的な社会生活を送っていくのに必要な知識やスキルを学ぶ時期である。
- 4 一時的に抑えられていた性欲が再び強まり、それが統合されて異性に向けられる時期である。
- 5 モラトリアムが終わり、形成された明確な自己概念を踏まえた行動が可能になる時期である。

問題 12 過重労働によるストレスへの対処法（コーピング）に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 適度な飲酒や運動などによって気分転換を図ることで、過重労働そのものを改善するとよい。
- 2 日々の仕事で起こるいら立ちごとには、慣れることが最善の方法であり、それによって健康が損なわれることはない。
- 3 過重労働で生じる苦痛な感情や欲求や記憶を意識から締め出し、「自分が苦痛に思っている」ことすら打ち消してしまうとよい。
- 4 過重労働を続けることで、ポジティブな自己像を維持し、自尊心を高めるとよい。
- 5 信頼のできる上司に過重労働による心身の苦しみを相談し、業務量や業務内容の調整を依頼するとよい。

問題 13 ピアカウンセリングに関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 相手に自分は「こうである」と感じているがまま、あるがままの自分について伝え、相手からもそれと同じことが返ってくる。
- 2 疾患や障害、貧困などで苦しんでいる人には、「大変ですね」と言ってねぎらうことが大切である。
- 3 ピアカウンセリングは、思春期のさまざまな悩みについて上級生が下級生に対してサポートを行うというように、未成年者同士でも実施が可能である。
- 4 メンバー間の人間関係を円滑にし、集団の士気を高め、集団をまとめ、維持することに努めることが大切である。
- 5 クライアントという個人を尊重し、防衛的にとりつくろったり、権威的になったりせずに、正直な自分を表現するという真実性が求められる。

問題 14 心理療法に関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神分析では、無意識を重視し、学習理論に基づいてエゴの適切なはたらきを促す。
- 2 遊戯療法では、退行という防衛機制を利用し、言語的なやりとりが可能な成人を対象とする。
- 3 心理劇（サイコドラマ）の実践的適用の領域は幅広く、学校において生徒指導の体験的な教育方法として児童・生徒に対して行うこともできる。
- 4 ブリーフ・サイコセラピーでは、個人の信念や思考様式などの認知プロセスそのものの変容や認知プロセスの変容を手がかりとして行動変容を目指す。
- 5 家族療法では、家族を対人関係場面での対応の仕方に困難がある人々ととらえ、対人関係づくりの技能の学習訓練として家族がロールプレイングを行う。

心理学理論と心理的支援

問題 8

正答 2

- 1 適切でない。選択肢は合理化の例である。合理化は、思いどおりにならなかった結果に対してもっともらしい理由づけをすることで、自らの落ち度を隠そうとする防衛機制である。

〔『精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー 心理学——心理学理論と心理的支援』へるす出版, 2008年(以下「心理学」へるす出版), pp. 53~55〕

- 2 適切。投射は、自分のもっている対象者に対する好ましくない感情を、自分ではなくその対象者がもっているのだと相手に転嫁することで、罪悪感を抱いたり、自己否定するのを避けようとする機制である。

〔「心理学」へるす出版, pp. 53~55〕

- 3 適切でない。選択肢は取り入れの例である。取り入れは、イソップ童話に出てくる「虎の威を借るキツネ」のように、権力をもっている人物や威光のある人物の陰に入り、あたかも自分も権力や威光がある人物であるかのように周囲に思わせる機制である。

〔「心理学」へるす出版, pp. 53~55〕

- 4 適切でない。選択肢は反動形成の例である。反動形成は、本来の欲求や気持ちをそのまま表出すると好ましくない状況に陥るので、それとは正反対の欲求や気持ちを有しているかのように考え、行動する機制である。

〔「心理学」へるす出版, pp. 53~55〕

- 5 適切でない。選択肢は、置き換え又は置換の例である。置き換えは、怒りや不満といったネガティブな感情を直接の対象者に向けるのではなく、その対象者よりも弱い人や物に向けて発散させる機制である。

〔「心理学」へるす出版, pp. 53~55〕

問題 9

正答 1

- 1 適切。意識することが難しく、さらには、言葉ではうまく表現できない記憶が潜在記憶で、技能や技などの手続き的記憶を指す。たとえ健忘症になっても劣ることがないという特徴がある。

〔「心理学」へるす出版, p. 34〕

- 2 適切でない。選択肢はワーキングメモリー（作業記憶あるいは作動記憶）の説明で、暗算をしたり小説を読んだりするときに必要な記憶で、積極的に書き換えながら保持されるという面がある。

〔『新・社会福祉士養成講座②心理学理論と心理的支援（第3版）』中央法規出版, 2015年(以下「心理学理論と心理的支援」中央法規出版), p. 72〕

- 3 適切でない。選択肢は感覚記憶の説明である。感覚記憶は、五感を通して脳に伝えられる記憶で、視覚的なものはアイコニック・メモリー、聴覚的なものはエコニック・メモリーと呼ばれる。

〔『社会福祉学習双書2018 心理学——心理学理論と心理的支援』全国社会福祉協議会, 2018年(以下「心理学」全国社会福祉協議会), p. 31〕

- 4 適切でない。選択肢は結晶性知能の説明である。キャッテル (Cattell, R. B.) は、知能を流動性知能と結晶性知能に分けた。前者は、短時間で課題を修得するのににかかわり、20歳ぐらいをピークとする知能であるのに対して、後者は成人期以降も徐々に発達し得る技の記憶といえる。

〔「心理学理論と心理的支援」中央法規出版, pp. 81~82〕

- 5 適切でない。選択肢はエピソード記憶の説明で、加齢によって著しく低下する。言葉の意味や普遍的知識からなる意味記憶と合わせて、宣言的記憶あるいは陳述的記憶と呼ばれる。

〔「心理学理論と心理的支援」中央法規出版, p. 73〕

問題 10

正答 4

- 1 適切でない。YG性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）は、ギルフォード (Guilford, J. P.) の性格特性論を基礎として、矢田部達郎が大学生に対する調査データをもとに性格検査として構成したものである。YGのYは矢田部、Gはギルフォードの頭文字である。

〔「心理学理論と心理的支援」中央法規出版, p. 16〕

- 2 適切でない。選択肢はアイゼンク (Eysenck, H. J.) の理論の説明になっている。キャッテル (Cattell, R. B.) は、性格を構成する要素として、支配性や服従性など合計16個の特性を抽出し、その結果をもとに16性格特性検査（又は16人格検査）(16PF) を作成した。

〔「心理学」へるす出版, p. 44〕

- 3 適切でない。選択肢はフロイト (Freud, S.) の性格理論の説明である。ユング (Jung, C. G.) は、一般的な心的活動をリビドーという言葉でとらえ、そのリビドーがどの方向に向かうかをもとに内向型と外向型に大別した。

〔「心理学」全国社会福祉協議会, p. 50〕

- 4 適切。価値観や生き方にもその人らしさが映し出さ

れると考えたのがシュプリング (Spranger, E.) で、人生における価値のおき方に着目して、理論型、経済型、芸術型、権力型、宗教型、社会型の6つに性格を類型化した。

(『心理学』全国社会福祉協議会, p. 50)

- 5 適切でない。選択肢は、フリードマン (Friedman, M.) とローゼンマン (Rosenman, R. H.) の理論の説明になっている。フロイトは、心を3層構造でとらえ、その現れ方によって性格が異なると考えた。なお、タイプAとは、心筋梗塞などの血管疾患にかかりやすい人の性格で、タフ、活動的、短気、競争心、攻撃性などがあげられる。

(『心理学』へるす出版, pp. 44~45, 『MINERVA社会福祉士養成テキストブック②心理学理論と心理的支援 (第2版)』ミネルヴァ書房, 2014年 (以下『心理学理論と心理的支援』ミネルヴァ書房), p. 53)

問題 11	正答 4
-------	------

- 1 適切でない。ビューラー (Bühler, K.) の発達理論によると、思春期の頃は仮の人生目標を設定し、その達成に向けて試行錯誤を始める時期である。選択肢にあるような人生の目標が明確になるのは、青年期に入ってからのことである。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p. 128)

- 2 適切でない。自我の確立に伴う第二次反抗期が終わりを迎えると、親子関係がそれまでの反発から逆方向の接近へとつくり直される。こういったことが起こるのは、思春期ではなく青年期後期である。自我の確立に伴って、親の立場や考えを理解することが可能になったことが背景にある。

(『心理学理論と心理的支援』ミネルヴァ書房, pp. 70~71)

- 3 適切でない。一般的といわれる発達諸相によると、基本的な社会生活を送るのに必要な知識を学ぶのは児童期である。青年期に入ると、社会的な自立に向けて職業を選択し、社会人として勤労していく喜びを感じるようになることが求められる。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp. 129~131)

- 4 適切。フロイト (Freud, S.) の発達段階説によると、児童期は潜伏期とされて性的欲求が一時的に抑えられていたものの、思春期に性器期に移行することで再び性欲が強まり、それが異性という性対象に向けられる。

(『心理学』へるす出版, pp. 69~70)

- 5 適切でない。エリクソン (Erikson, E. H.) の発達理論によると、青年期は同一性対同一性拡散という心理社会的危機にあり、その達成に向けてモラトリアムの

状況にいるのが青年期、とりわけ青年前期とされる。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp. 128~130)

問題 12	正答 5
-------	------

- 1 適切でない。気分転換を図ることは、ストレスサーによってもたらされる情動を統制、軽減しようとする対処方略である「情動焦点型コーピング」と呼ばれるが、これは過重労働というストレスフルな状況そのものの改善にはつながらない。ストレスフルな状況そのものを直接的に改善する対処方略は「問題焦点型コーピング」である。なお、情動焦点型コーピングのうち、飲酒は一時的な気分転換にはなるが、アルコール依存の問題が生じる可能性があり、危険である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p. 178)

- 2 適切でない。日常で起こるさまざまな立ちごとは「デイリーハッスル」と呼ばれ、健康障害と関連が深い。これはラザルス (Lazarus, R. S.) と Folkman, S.) の研究から得られた知見である。デイリーハッスルが長期間続くことはストレスとの関連を高めるため、慣れるのを待つという対処法は適切ではない。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp. 163~164)

- 3 適切でない。これはストレス対処法 (コーピング) ではなく、抑圧という防衛機制である。アンナ・フロイト (Freud, A.) が父であるジグムント・フロイト (Freud, S.) の創始した精神分析理論に基づき防衛機制を体系化した。防衛機制は心理的反応を含めた無意識的な水準のストレスへの対処であるのに対して、コーピングは意識的な水準のストレスへの対処過程である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp. 50~51, p. 178)

- 4 適切でない。人が同じ行動を取り続けるには、ポジティブな自己像と自尊心がかかわっているため、自己否定を避けようとする心理がはたらき、変化を避けようとする。これを「自己否定の困難さ」と呼び、ストレスを高める要因の1つである。また、ストレスが高い場合には、物ごとを落ち着いて考えることができず、かつての行動を自動的に取り続けるという「自己呪縛の心理」がはたらくこともある。このように過重労働をもたらす職場環境を改善することは、心理学的な見地からみて、非常に難しいことである。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p. 166)

- 5 適切。ストレスサーやストレスフルな状況そのものを改善しようとする問題焦点型コーピングである。ラ

ザルスとフォルクマンが提唱したコーピングには、大きく分けて「問題焦点型コーピング」と「情動焦点型コーピング」があるが、前者には長期的にストレス低減の効果があり、後者には一時的・短期的な効果がある。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p.178)

問題 13	正答 3
-------	------

- 1 適切でない。これは自己開示の返答性のはたらきのことである。自己開示には、①感情浄化（うっ積する感情の発散）、②自己明確化（自分の意見や考えのまとまり）、③社会的妥当化（他者の意見と比較しての気づきや自己評価）という3つのはたらきがある。なお、福祉の対象者に自己開示をしてもらうためには、真摯に関心を示して相手の話を聴き、時に自らも自己開示をすることが大切である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp.94～95)

- 2 適切でない。これは、ストレスを予防する資源であるソーシャル・サポートのうちの情緒的サポートである。ソーシャル・サポートは、①情緒的サポート（気持ちのねぎらい）、②評価的サポート（正当な評価）、③道具的サポート（問題への実質的な援助）、④情情報的サポート（問題処理に役立つ情報の提供）の4つに分類されている。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p.176)

- 3 適切。ピアカウンセリングの「ピア」とは「仲間」や「同僚」という意味をもち、例えば、教育領域では上級生が下級生を、産業領域では先輩社員が後輩社員をというように、クライアントにより近く、対等な立場にいる人間がカウンセリングを行う。カウンセラーとクライアントの立場が近いため、クライアント役からすれば「わかってもらえる」という気持ちになりやすく、カウンセラー役からすれば共感しやすい。未成年者同士でも実施が可能であるが、本来はカウンセラー役は専門家からトレーニングを受けて臨む必要がある。

(氏原寛・小川捷之・近藤邦夫ほか編『カウンセリング辞典』ミネルヴァ書房, 1999年, p.510)

- 4 適切でない。これは、三隅二不二^{みすみじゅうじ}らが唱えたリーダーシップのPM理論のうちの、リーダーが発揮するM機能のことである。集団を統率するリーダーには、P機能（目標達成）とM機能（集団維持）の機能が求められる。業務についての知識が豊富で、技術水準が高く、部下にきめ細かく指導し（P機能）、仕事や生

活についての部下の悩みに耳を傾け、職場の人間関係のトラブルを解決し、職場の雰囲気改善する（M機能）と、部下たちに感じられるリーダーシップが有効である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, p.100)

- 5 適切でない。これは、ロジャース（Rogers, C. R.）のパーソンセンタード・カウンセリングにおけるカウンセラーのあり方である。ロジャースの実践は、個別カウンセリングだけでなく、グループを対象としたエンカウンター・グループにも発展している。さらに、ロジャースはカウンセリングでクライアントの建設的な人格変容を起こすためには、「カウンセラーはクライアントに対して無条件の肯定的関心を経験している」などの5つの必要十分条件をあげている。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp.195～196)

問題 14	正答 3
-------	------

- 1 適切でない。精神分析は学習理論に基づいていない。精神分析では意識と無意識と前意識の存在を仮定し、そこではたらくエゴ（自我）、エス（イド）、スーパー・エゴ（超自我）という心的装置の存在を仮定する。そして、無意識のエスの活動と、意識のエゴの活動が適切に関連するような援助を、主に自由連想法という方法を用いて行う。精神分析ではこうした精神内界の動き（これを「力動」と呼ぶ）と過去の傷つき体験を解消して、現在の現実適応を良好にすることを目指す。なお、学習理論に基づく心理療法は行動療法である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp.196～197)

- 2 適切でない。遊戯療法は、言語では十分に自らの内面を表現できない子どもに適用されることが圧倒的に多い。子どものクライアントを対象に、遊びを主な表現手段、コミュニケーションの手段とする。なお、退行は防衛機制の1つで、苦痛な感情状態に耐えかねて、依存性を発揮したり、子どもっぽくふるまう状態であり、精神分析的に解釈される概念である。

(『心理学理論と心理的支援』中央法規出版, pp.50～51, pp.199～200)

- 3 適切。心理劇（サイコドラマ）の適用領域は、教育、精神科、司法矯正、障害児・者支援施設、高齢者施設、対人援助専門家研修などと幅広い。モレノ（Moreno, J. L.）が創始した即興劇を用いた集団心理療法である心理劇は、集団における相互の対人関係や即興劇という行為を通して個人の創造性や自発性の発展を促すこ

とを目的としている。そのため年齢や障害の有無にかかわらず効果を発揮するが、心理劇の5要素（監督や補助自我など）や3つの相（シェアリングなど）と呼ばれる治療構造を熟知した上で実施する必要がある。

（『心理学理論と心理的支援』中央法規出版，pp.205～206）

- 4 適切でない。認知プロセスそのものに焦点を当てて、不合理な信念（イラショナル・ビリーフ）や認知のゆがみの変容を目指すのは認知療法や認知行動療法である。ブリーフ・サイコセラピーでは、問題の原因を追究することはせず、なぜ同じ問題が続いているのかに焦点を当て（問題志向モデル）、問題が起こらなかった状況も確実に存在するので、その状況の増大を目指す（解決志向モデル）。

（『心理学理論と心理的支援』中央法規出版，p.198，pp.203～204）

- 5 適切でない。家族療法では、家族はその構成員が相互に影響し合う1つのシステムととらえ、家族の成員が表す不適応や問題行動はその個人だけが原因と考えず、家族が相互に影響し合って原因と結果が生じているので、家族というシステムの問題として考える。なお、対人関係づくりの技能の学習訓練とはSST（社会生活技能訓練）のことであり、SSTではロールプレイングを行うことが多い。

（『心理学理論と心理的支援』中央法規出版，p.204，p.207）